

巻頭言

河村 満

(昭和大学医学部内科学講座神経内科学部門)

本号から岩田 誠先生に代わって、本誌編集主幹の指名を受けましたので、ご挨拶させていただきます。

私は、学生時代に平山恵造先生（千葉大学名誉教授）の『神経症候学』（文光堂）を読んで、大変な刺激を受けました。神経症候と神経系との関連を解き明かす臨床医学的アプローチに大きな魅力を感じたのです。母校の横浜市立大学には神経内科の独立した講座がまだなかったこともあり、卒業してすぐに、平山先生が開設・主催なさった千葉大学神経内科に入局させていただきました。その後、大脳病変の神経症候学に特に興味を持って、臨床神経心理学を専門に選びました。研究を進めるうちに、神経心理学は、生理学や心理学などの多くの領域と関連があることがわかり、内外の多方面にわたる専門家と知り合うことができました。16年ほど前に、現在の昭和大学神経内科に移りました。本誌の前身である『脳と神経』の編集メンバーに加えていただいたのは12年前で、まだ助教授の時であったと思います。最初の会議で近くの席にいらした柳澤信夫先生（信州大学名誉教授）が、緊張している私に優しく声をかけ、リラックスさせてくださったことをまだ鮮明に記憶しています。

神経学はその頃とまったくといってよいほど様変わりしました。分子遺伝学的アプローチから病因についての莫大な業績が蓄積され、それは現在も継続中です。免疫性神経疾患も病態・治療の両面で格段の進歩がなされつつあります。一方で、高齢化を背景に認知症患者がどんどん増え、研究は多方面から進行中です。純粋運動障害と考えられていたALSが認知症と合併することも示され、今では常識となりました。脳卒中は依然として神経内科・脳神経外科の病床の大多数を占めています。脳卒中治療は救急体制の整備という社会的問題の解決とともに、予防的観点からももっと進歩する必要があるのです。

ところで、『失われた時を求めて』の著者 Marcel Proust (1871-1922) は喘息持ちであったそうです。あまり知られていませんが、20世紀初頭のフランスでは、喘息は神経疾患と考えられていました。事実、Proust は医学部（衛生学）の教授であった父親の紹介で、Babinski をはじめとした多くの神経内科医の診療を受けていま

す¹⁾。喘息を神経疾患と考える立場は現在ではもうないと思います。しかし、発作性に症状が発現し、重積状態も引き起こす気管支喘息が片頭痛・てんかん同様に神経疾患と考えられていたことを知っておくことは重要であると思います。一見奇抜な問題提起が実は正解であったことは自然科学では稀ならずみられることだからです。奇抜にみえる新しい問題提起は、しばしば若い人の柔軟な感性から生まれてきました。

若い方に新しい編集委員のメンバーになっていただいたのも、そのような気持ちからです。また、これまで手薄であった精神医学やイメージングによる脳科学研究の専門家にも加わっていただきました。今後の神経学の発展はこの2つの領域を抜きに語れません。新編集委員のバックグラウンドについては、本号の座談会「BRAIN and NERVE の未来」をぜひお読みください。

2011年はBrocaのLeborgne報告から150年、Jackson没後100年目に当たりましたので、岩田 誠前編集主幹の司会で、特別座談会を企画して、2回にわたって掲載し、大きな反響がありました。2012年はLewy小体発見から100年、Wilson病の最初の記載からも100年目です。これらについても本誌流に取り上げたいと構想を練っています。

何より魅力的なテーマを取り上げ、優れた企画を立て、神経領域の研究、臨床の奥深さをわかりやすく表現したいと思います。そうすることで、これまで以上に広い領域の読者に読んでいただき、本誌が脳・神経に関わるすべての学術の発展に資することになればこの上ない喜びです。

いつの間にか若輩とはいえない年になってしまいましたが、若いメンバーに負けないくらい張り切っています。何卒ご指導、ご支援のほどよろしくお願いします。

文 献

- 1) Bogousslavsky: Marcel Proust's Diseases and Doctors: The Neurological Story of a Life. In Neurological Disorders in Famous Artists-Part 2. Frontiers of Neurology and Neuroscience vol 22. Bogousslavsky J, Hennrici MD (eds). Karger, Basel, 2007, pp89-104